

から流れ、一向と道に流る見よ。……風流を

の古詩を今更な語にしてあるわけがある。……
（流）の意は、
風流を

この流と流る （流る） 風流の （流る） 日がある。 （流る） 之の

身を合せずしてこの流を吟に下らふかいて行

流と （流る） 之を吟しどある。

掌法 肺宝死流 執微 作淨流 に入るときは

難、其れ出るときは微。入難と知れば外塵の

依りし、出微と知れば内心の所をさし。内心の

所をさし、外塵の依り

流る、
元流、
流るの一致、
とあるが、

別 る の 鏡 の 鏡 と 合 せ ず 、 亦 信 と 離 せ ず	又 亦 物 と 離 せ ず 、 譬 の 信 鏡 の 光 照 る か 如 し	又 曰 く 夫 れ 離 と 云 ふ の 以 は 、 信 物 と 合 せ ず	津 行 し 、 信 微 の し て 有 り べ か ら ず 、 故 に 無 信 し	く 、 信 津 に し て 染 有 り べ か ら ず 、 染 有 り べ か ら ず	に 微 と 名 づ く 、 混 同 と 一 と 物 す 、 離 行 く 微 也	入 に 懸 る の に 離 と 名 づ く 、 用 に 離 る か ら ず	寂 滅 の 思 法 、 相 謂 つ 可 し 、 信 津 の 信 離 微 の り と	能 所 が な ば 慈 意 の 乘 馳 せ ず 、 語 欠 移 す 能 り ず	け れ ば 万 有 極 有 る と 能 り ず 、 万 有 極 有 る と
---	---	---	---	--	--	---	---	--	---

又虚空の一切の念入して念著する所玩すか如し。
 五也七了すこと死何ぞ、五音も亂すこと死何ぞ。
 万物も物はること死何ぞ、本林羅も 亂るること死何ぞ。
 胡ん丈と教と謂ふ有り。 従ふと云ふ所以は任如
 にして形をく、色をく、~~受~~相をく、念用万端
 にして、其の容をかたち見ず、百巧を念死して、其
 う印を點けえず、之を殺れども見るべからず、
 之を臨む心も痛くべからず。 其れども恒如万
 徳有り。 非常不断而断不散、故に之を徳と知す
 心とある。 徳を以て教の強けり、心は 此に徳と知す。

活字は就法と穩定。この両者が矛盾せざる

活字と活字と借りて読む。活字の所天

地の春と改訂界の春とと同時の強つて来る。

此が前人の言葉と借りが混みながらの奥の

述べよと無回の説く。

穩定するはと總總降神の春は純然の世

所謂神の世の心ある世の心ある世の心ある世

の心ある世の心ある世の心ある世の心ある世

の心ある世の心ある世の心ある世の心ある世

の心ある世の心ある世の心ある世の心ある世

の心ある世の心ある世の心ある世の心ある世

純然の世の心ある世の心ある世の心ある世

下巻の集載正の神皇正統記の巻末

これと神皇正統記の世系と云ふ。すなはち眼を閉じて心内へ没入して
迷ひと、眼を閉じて真面目に経験した世界であらうのが、如何うしたなら
この双つの世系が矛盾することなく、絶対正統の心象と字義的世系
像とが一致しと一致して表裏出入唯

百五十五十四回

表裏出入唯

不二のそのど百り行ふかと言ふ事が佛教、神

道と通じこの根元、心であつて、神道は

伊弉那伊弉諾の神、その一環の心象と

行ふ。この公案は佛敎として可成る

の公案であつて、神道すなはち神皇正統記

の法を以て世に示すは、神皇正統記の神代卷

神皇正統記の神代卷

(二十五 三座説法) 仰山が夢に彌勒の所に行き、第三座に就かされた。一尊者が近づて槌を打つて云つた。本日は第三座の説法に當る。そこで仰山は自覚して云つた。「大乘の法は一、異(多)、有、無の四句を離れ、(一)變化展開(二)九十六(百)の非を絶したものである。諦かに聞け、……以上で就て一応願向いよう。これは説法したことであるが、説法しなかつたことが、説法したと云へば相手が無いのだから本當でない。説法しなかつたと言つても言つたのだから本當でない。口を開かず聞かずと云つても百非どころでない。十萬八千の非である。……白日青天の下、夢中に夢を説く、奇々怪々、衆を誑かす。(以上公案大意)

この公案は初心者には難解である。佛教も神道も純粹の精神世界の消息である。精神はたい人間の主観としてのみ存在する。國民精神とか群集心理などと云ふ客観的な精神が考へられるも、それは個々の主観を集合または抽象したものである。その主観が絶対主観(ヘーゲルの云ふ主観態へ無限的眞態)として淨化拡大自証されても、それは天張り依然として主観である。だが此の主観の眞態が「夢裡明々に六趣あり」と云ふ如く自証され確立することが、人間が神の子、佛自体であり、人間の思惟が神の思惟、佛の思惟として眞に自由と自律性を發揮する所以である。哲学も科学もすべて文明は人間の此の自由と自律の所産である。

特に此の公案の夢と云ふものは客体、対象を伴はぬ純然たる主観部の心象であつて、その夢で説法したと云ふことは、説法したことにならうかどうかが、これ主客観世界の事として取扱はうとしても全然無意味である。世の中十万人が嘲笑はうとも、自証し得た眞理は眞理である。神はみづから疑惑を持たぬ。箇中の事は箇中で肯つて

はよい、即ち巧筆微笑である。布斗麻適(摩尼珠)は客観的に存するものではない。この箇中にもみ存する。箇中の世界を神道で天の岩屋の内景と云ふ高天原と云ふ。古事記言靈百神がその純粹主観の自己精神内面の法界の原理であることを述べては、麻適の实体は掴み得ない。

◎二月十七日研究会開催。末会井上大猷、坂井春夫、七條記實一所使、後藤出夫、石川信(六)

↓これをその變化展開である九十六(百)

神道から 無門閑講話 (原典を座右にお読み下さい)

(二十六 二僧卷簾) 清涼の大法眼の所に僧が食事前に参禪した。清涼は手で簾を捲いた。この時二僧が同じように起上つて簾を巻いた。清涼が云つた。一人は禪の

慧を得てゐる。一人は然らず。……試みに答へよ。是はどちらの僧が道を得て居りどちらが失つてゐるのか。これを見抜くことが出来たら清涼國師が一得一失を云々して失敗した所が判る。とは云ふものの此の事は是非善悪(得失)の意味で論議してはいけない。……簾を巻き起して明々として太空に徹する。然しその太空に徹しても末だ猶ほ我が家(清涼が開いた法眼室)に叶つたものではない。その太空から簾を下ろして、綿々密々隙回風を通さないようにする事には及ばない。(以上公案大意)

二僧が簾を巻く気鋒の相違を看て清涼が批判訓戒したわけである。無門の評も頗も同じ事を重ねて述べてゐる。禪機は得失ではなく「無功德」であるから、二僧の動作を實際主義的に見て得失を云々したら一応禪ではない。と云つてもそのつから其処に兄弟の差が現はれる。実はどちらも禪である。前者は空相無差別、後者は空相差別の價値判断である。

簾は家徴であつて、巻起すれば廓念洞豁の本源の空(玄)である。だが空をけが佛教ではない。是を坐し下ろせば実相である。その実相の曼荼羅を書き記して掲げ、斎ま茶つて鏡とするのが神道である。その曼荼羅を作るに哲学的な概念を以てしては佛の桶を隙だらけのものとなる。易の如く數だけを組立てたのでは「魔女の九九」(ケイテの「ファウス」)に終る。佛菩薩の繪を並べてみても遊戲に過ぎない。本當に綿々密々まき廻すためには言盡五十音、一切種智の配列を以てしなければならぬ。

(二十七 不是心佛) 南泉に或時僧が向ふた。「わざと(還へつて)人のために説かない様な法が有りますか。」泉が云つた。「有る」。僧が云つた。「人の爲に説かない法とは如何なるものですか」。泉が云つた。「それは心でも、佛でも、物でもないものだ。……南泉はこの質問を受けて、自分の持物の全部の底をばいてしまつて、ひどく零落浮浪した……教へ方が丁寧過ぎると本来の生命の自覚の妨げとなる。無言こそ本當に功德がある。たとへ滄海が桑田に變じようとしても、弟子のために説明すべからず。(以上公案大意)」

大流山 大志

大流山 大志

金回

敢て人の属に説かない法とは説いても説けない法である。それは心でも佛も勿論物(色相)でもない。その心や佛や物が其処から生まれて来る究極の無限の或るもの(实在)である。親鸞はこれを「念佛は無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議のゆへに」と云った。人間に判る事柄はすべて思惟以後の事だけであつて、その人間として思惟せしむる者、人間によつて思惟する者が何であるかは判らない。此処が人間存在の限界である。不可説のものに敢て(還へつて)説こうとしたら、直觀せしその本極に至る妨げとなる。

然も南泉が向に対して「慧々不足心佛と答へたのは、有りたけの言葉さ居してしまつた事で、余りに親切丁寧過ぎて貪妄してしまつた。口が腐つても聖諦第一義を説明してやつてはならぬ。これが東洋の神祕哲学としての禪である。少し意味が異かぶが第三文明会で布斗麻迦を説いて丁寧過ぎたことを後悔してゐる。聞いた者は言葉と文字のみを追つて実体を捕へない。言葉と文字だけを掠めて行つて商賣にする者もある。この辺から橋の枝が延びることを注意しよう。

すなはち知性のはり

11,500円
3,000円

10,000円
3,000円

WIRAOI

金回

味三

WIRAOI

味三

無門開講 話(承前)

神道に入るためには禪が近道である。神道の世界である高天原はそのまま禪で説く「空」の境涯であり、神道布斗麻呂言靈字は佛(神)の慈悲と智慧の純粹理論である摩尼宝珠である。神道者が高天原の世界の人であるために、禪が「空」の悟りだけのための禪にならないうちに神道に立つ本会が無門開を講義する、神道者が禪(佛敎)を白眼視することは末高天原に至らぬからであり、禪が神道と無視することとは辟支佛の境涯に停頓することである。

神道は人間はすべて初めから高天原の境涯に住んでゐる者であることを前提としてその高天原の中実である布斗麻呂を説いてゐる。然し末法の現代へに取つてはその神道の高天原の境涯に入ることを自体が先決問題である。だが神道は高天原に入る道は直捷敎へることなく、三千年末その指導を佛儒耶の三敎(釈迦、老子、

孔子、モーセ、イエス)に委託してある。その世界の敎への中で最も合理的で道徳階級に高天原の人となる道を説いたものの一つである禪宗無門開を本会が取り上げるのはこの爲である。

(第二十八 久響龍潭) 龍潭の許に徳山が法を向ふに來て夜に至つた。潭が云つた、「夜が更けた、君は何故山を下りぬのか」。山は遂に簾を掲げて出たが、戸外が暗いを見れば返つて云つた。「外が真暗です」。そこで潭は紙燭を点して渡した。山がそれを受取るうとした時、潭はいきなり灯火をフツと吹き消した。山は此処で忽然として自ら省みるころがあつたので潭に向つて私をした。潭が云つた、「君は今何の道理が判つたのか」。山が云つた、「今日以後私は天下の先和尚達の言辭を疑ひません」。翌日潭は講堂に登つて云つた。「この中に一人の男が居る。牙は劍樹の如く、口は血盆に似て、棒を打つたこと振り返りもしない。いつれ將來彼自身の道を擧すであらう。山は遂に携へて來た金剛經疏抄を片手に、炬火を片手に法堂の前に提起して云つた。「諸の道の解義を窮めぬが、一毫も空虚の中に置いた如く、世の理論を尽したが、一滴も巨谷に投ずるに似たようなものであつた」。そうして金剛經疏を焼捨てて龍潭を礼辭した……。

(以下はこの物語りの前提である) その初め徳山は金剛經を説く学者であつた。彼が未だ龍の御寮を出ない時、心に憤懣を抱いてきて、敎外別伝の禪を破析しようとして南方へ來た。豊州の路上でお婆さんから菓子を買はうとした時、お婆さんが云つた「お坊さん、車の中にあるのは何の本かね」。山は答へた「金剛經疏抄」。お婆さんが云つた「そのお經の中に、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得とあるが、お坊さんほどの心を掴まへようとなさる」。徳山はこの質問を受けて口をへる字に曲けたが、お婆さんがまた本当には死に切つてゐないことを動破した。そこでお婆さんに向ふた、「このあたりには如何んなお師匠さんが居るのか」。お婆さんが云つた、「五里先に龍潭和尚が居る」。

向接の

直接の

そして龍潭の許に至って徳山は傍聴した。彼は前言の豪語と一致しなかつたわけだ。龍潭は徳山(見)を憐れんで非常手段を取った(醜も覚えず)。徳山にいざまかの知識の種(火種)紙燭にかけて云ふ)が残つてゐるのを見て、いきなり悪水まぶつかけて消し殺してしまつた。(一洗滌殺)冷静に観察すればこれは一場の笑話である。遠くを名を聞いてゐるよりも直接をみる方がよい。合つてみるよりは名を聞いてゐる方がよい。徳山は祖師の鼻孔(俾の知見)を獲得したが、そのために方便の教眼(哲学理論)を潰してしまつた。……(以上公案大意)

公案としてはこのままで特に説明を要する所はない。戸外は暗いと云ふ字看徳山の心内の不安を龍潭が看て、いきなり紙燭を吹き消した。この時徳山に現前したものはその暗黒裡に我有りと云ふ深奥な自己意識である。すなはち自己の発見である。外的條件や字面知識経験に頼つて行動せず、みづからの直接の判断によつて出路を得る本来の自主性の発見である。一場のハントマイムであるから「好茶」と云つたわけである。次に意義ある事は徳山がその時まで後生大事に持つてゐた金剛經疏抄を焼いてしまつた事で、摩尼、布斗麻遜はその時に於て自分自身から出て来る真理であり、同時にその自己に現れた真理を自己審判する神法である。本来の自己を発見したならば摩尼は其処から滾々として湧き出て来る。これを天の眞奈井の眞清水と云ふ。摩尼の活用の前には釈迦の說法もキリストの宣訓も同格である。その摩尼の全体系を示してある教科書は古事記以外には存在しない。佛敎もキリスト教も西洋哲學も自分が摩尼を活用するに至る過程に於ける練習法であり解説に過ぎない。布斗麻遜は主体として精神的に見る全宇宙であつて、これを總持と云ふ。

混乱の劫末の世に汲々踰踏と順応しながら、儂ないしがない生活を送らうとするならその渾沌たる世界の學問を愈々詳細に勉強しなければならぬが、然し人類の發智を法印して劫盡の大火の彼方に至る至幸至祐の第三の文明時代を建設しようとするなら精神界の総持である布斗麻遜(人類の第一文明)と、そして近代科学のエッセンス(

類の第二文明)だけを携へて行けばよいのである。六祖慧能は衣鉢を燒き、徳山は書物を燒いた。権直の如くにして権直ではないのである。初め徳山が龍潭に會つた時こう云つた。「大しく龍潭と響く、倒来するに及んで、潭もまた見ず、龍もまた現せず」と。龍潭はこれに答へて「子親しく龍潭に到れり」と云つた。佛眼を得なければ親しく眼前にしまも龍も潭も見る事が出来ぬ。「名を聞かんよりけ云々」の頌はこの事を云つてゐる。「これを言ふは白の如く、これに就けば雲の如し(史記)」とは帯亮の徳を称へた言葉である。

龍潭に親直は會ひキリストに會つても、それが親直でありキリストであることが判らぬ。

本来本源

無門閑講話

(三十九 非風非幡) 六祖の所で或時風が赤の旗を翻してゐるのを見て二僧が談論した。一人は幡が動くと言ふ、一人は風が動くと言ふ。どちらもまた直に叶(契)はない、六祖が云つた、風が動くのも幡が動くのでもない、汝(仁者)の心が動くのだ。二僧は悚然とした。

これは風が動くのでも、旗が動くのでも、更に心が動くのでもない、この時六祖の魂は一体何処に居るのたろう、若し此の向の消息を懇切に見究はめ得たなら、二僧が鉢を賣つて金を得たことになる、六祖はこらへが物で心が動くなどと禪宗の秘密に口をすべらせた。……風、幡、心が動くなど、云ふのは何れも同じような妄想に過ぎない。只口を開いて饒舌をだけ、議論に隨つて居ることを覺らない(公案大意)事物の真相現象がどうして生まれるかに就ては「鐘声七條」のところで神道の支

美二神の威応同交、宇宙創造の原理として既に説いた。その公案が云はんとするところはそのも一つ先の消息である。風も幡も心も動くやないならば何も動いてなとは居ないのだ。動かないものがあるからこそ動くことが判るのである。その動かないものは「不生不滅 不垢不淨 不増不減」のものである。六祖の魂は此処に居る、各人の魂の芯樁としてそれが存する。その名を「不動明王」と云ふ、すなはち神道の象であり、統覚の实体である。天頂から地底を貫いて此の軸が立つてゐる。すなはち「生命の樹」であり「扶桑樹」である。神道ではまたこれを「天の御柱、國の御柱」「一心の靈台、諸神受圖の本基」と云ふ。

OKUDOHAN